

J.H.カンペによる「実践的教育者の会」設立過程に関する考察

塩津 英樹*

Hideki SHIOZU

A Study on the Establishing Process of 'Gesellschaft praktischer Erzieher' by J.H.Campe

要 旨

ヨアヒム・ハインリヒ・カンペは、18世紀末ドイツにおいて活躍した教育者集団である「汎愛派」を代表する人物の一人として見做されている。教育史において、カンペは、「汎愛派」の総領バゼドウの協力者、またバゼドウの後継者世代の一人として知られ、その結果、広範囲にわたるカンペ固有の活動については十分に顧慮されてこなかった。しかし近年、バゼドウの後継者世代と言われるカンペ、トラップ、ザルツマン、ロホーといった人々に光が当てられ、彼ら固有の活動が評価され始めている。カンペは、18世紀末ドイツにおいて活躍していた教育思想家や教育実践家を招集して「実践的教育者の会」という組織を設立し、当時の教育思想を精査した。そして、その具体的成果として、全16巻から成る著書『実践的教育者の会による教育に関する普遍的点検』を刊行した。カンペの活動は、学問としての教育学が成立する前段階において、18世紀末ドイツの教育思想を精査する重要な試みであるが、これまで十分に顧慮されてこなかった。本稿では、このようなカンペの活動を分析することで、「実践的教育者の会」のコーディネーターとして手腕を発揮するカンペの新たな一面を明らかにした。

【キーワード：カンペ、汎愛派、実践的教育者の会、点検書、啓蒙雑誌】

1. はじめに

ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ (Campe, J.H. 1746-1818) は、どのような人物として知られているだろうか。「汎愛派 (Philanthropen)」の代表的人物。テッサウの汎愛学院におけるバゼドウの協力者。フンボルト兄弟の家庭教師。あるいは児童・青少年文学作家。このようにカンペは、広範囲にわたる活動から様々な顔が知られている。しかしカンペが、多数の協力者とともに、18世紀末ドイツの教育思想を精査したことは、あまり知られていないのではないだろうか。

カンペは、18世紀末ドイツにおいて活躍していた教育思想家や教育実践家を招集して「実践的教育者の会 (Gesellschaft praktischer Erzieher)」という組織を設立し、当時の教育思想を精査した。そして、その具体的成果として、1785年から1792年にかけて、全16巻から成る著書『実践的教育者の会による教育に関する普遍的点検 (Allgemeine Revision des gesammten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher.)』(以下、『点検書』と略記)を刊行した。『点検書』には、教育の一般問題、身体教育、知的教育、道徳教育、幼児教育、学校政策など広範囲にわたる内容の論文が収録されており、テーマの多様性からも、カンペ

が18世紀末ドイツにおける教育思想の精査に力を注いだことを確認することができる。

これまでカンペは、教育史において、あまり注目されてこなかった。カンペは、18世紀末ドイツにおいて活躍した教育者集団である「汎愛派」を代表する人物の一人として見做されるに留まっていたのである。しかし近年、バゼドウの後継者世代と言われる、カンペ、トラップ、ザルツマン、ロホーといった人々に光が当てられ、彼ら固有の活動が評価され始めている。これまで、彼らは「汎愛派」という枠組みの中で理解されてきたため、彼ら固有の活動は十分に顧慮されてこなかった。今後は、「汎愛派」という枠組みにとらわれることなく、バゼドウの後継者世代一人ひとりの活動について、丁寧な検証を進めていくことが求められるだろう。

そこで本稿では、広範囲にわたるカンペの活動の中でも、「実践的教育者の会」の設立という活動を取り上げる。カンペは、当時、ドイツにおいて活躍していた教育思想家や教育実践家を招集して「実践的教育者の会」という組織を設立した。そして、カンペは、協力者とともに、18世紀末ドイツの教育思想を精査し、その具体的成果として『点検書』を刊行した。カンペの活動は、学問としての教育学が成立する前段階において、18世紀末ドイツの教育思想を精査する重要な試みであるが、これまで十

* 高根大学教育学部附属教師教育研究センター

分に顧慮されてこなかった。このようなカンペの活動を分析することで、「実践的教育者の会」のコーディネーターとして手腕を発揮するカンペの新たな一面を明らかにする。

2. 先行研究の検討

「汎愛派」に関する研究は、パンロッシュの研究『汎愛主義の歴史』(1914年)に代表されるように、既に一定の蓄積がある。従来の「汎愛派」研究は、「汎愛派」の総領バゼドウを中心に研究が進められてきた。しかし、バゼドウの後継者世代については、ザルツマンやロホーといった「汎愛派」の代表的人物を対象とした個人研究を除いて、十分に行なわれてはこなかった。しかし戦後、1974年にヘルマン編集の『点検書』が刊行されたことにより、再び、「汎愛派」の活動が注目されるようになる。

近年、「汎愛派」の教育学への注目とともに、その教育理論を体系的に検討した先行研究として、ケルスティンクの研究を挙げることができるⁱ。ケルスティンクは、カンペと「実践的教育者の会」が編集した『点検書』を「汎愛派」の教育学の理論的成果と見做した。また森川は、18世紀近代の教育学の生成と成立をテーマに、ペスタロッチーと同時期に活躍した「汎愛派」に注目し、「汎愛派」の活動を、バゼドウを中心に統一的に捉えるのではなく、その多様性を顧慮することの重要性を指摘したⁱⁱ。さらに山内は、カンペの教育思想を研究する中で、「汎愛派」の方法主義的側面を強調する従来の「汎愛派」研究を批判し、カンペを「汎愛派」の中心に位置付けたⁱⁱⁱ。このような研究動向のなか、とりわけ注目に値するのが、アウスターマンの研究である。アウスターマンは、『点検書』を、学問としての教育学が成立する前段階の産物(生成途上の産物)と位置付けて、『点検書』の計画および内容、そしてカンペの協力者である「実践的教育者の会」の構成員について明らかにしている。さらに、自然、完成能力、至福という概念に注目し、『点検書』の理論的枠組みを再構成している^{iv}。

以上のように、近年の「汎愛派」研究においては、「汎愛派」の後継者世代の一人であるカンペの活動が注目されている。しかしながら、「実践的教育者の会」の設立というカンペの活動については、カンペの個人研究においても、これまで十分に顧慮されてきたとは言えない。学問としての教育学が成立する前段階において、18世紀末ドイツの教育思想を精査したカンペの活動を考察することは、カンペ教育思想研究においても一定の意義を有しているだろう。

本稿では、次のように考察が行われる。①まず、デッサウからトリッタウに至るカンペの活動を検討する。ここでは、カンペが「実践的教育者の会」を設立するに至った背景が明らかとなる。②次に、カンペが啓蒙雑誌に掲載した「実践的教育者の会」設立に関する計画を時系列に分析する。ここでは、カンペによる「実践的教育者の会」設立過程が明らかとなる。③さらに、当時、刊行

されていた書評誌を手掛かりに、カンペの活動に対する評価を確認する。ここでは、当時、カンペの活動が一定の評価を得ていたことが明らかとなる。④以上を通して、「実践的教育者の会」のコーディネーターというカンペの新たな一面を明らかにする。

3. カンペの活動

(1) カンペとデッサウの汎愛学院

ベルリンの南部に位置するアンハルト—デッサウ侯国は、1774年以降、生まれつつある博愛主義的な教育運動にとって重要な中心地であった。侯国は、固有の文化的、文学的な思潮によって人々の関心を集め、また同時期に作られたヴェルリッツの庭園によって、「庭園王国」としても賞賛された。この小さな侯国に、1774年、最初の博愛主義的な実験学校であるデッサウの汎愛学院が設立された^v。

デッサウの汎愛学院を創設したのは、「汎愛派」の総領バゼドウである。「汎愛派」の礎を築いたと言われるバゼドウが創設した学校は、革新的な実験学校として世間の注目を浴びた。同時代に活躍した哲学者カントも、汎愛学院を、新しい「教育の苗床学校」と熱狂的に賞賛し、支援を呼びかけたことはよく知られている。バゼドウは、汎愛学院を宣伝するために大規模な公開試験を実施した。公開試験は、1776年5月13日から15日にかけて3日間にわたって実施され、多数の著名人が参観に訪れた。来賓として訪れた大臣ツェドリッツをはじめ、ニコライ、ゲディケ、ヘンケ、メンデルズゾーン、レーゼヴィッツ、ロホー、テラー、ヴァイセ、ツォリコフファー等といった人々とともに、カンペもまた参観者の一人であった^{vi}。デッサウで開催された公開試験の際、カンペは、ゲディケと出会ったが、この出会いは重要な意味もっていた。なぜならゲディケは、しばらくして、カンペが自らの計画を進める際、重要な協力者の1人となったからである。

公開試験の約4ヶ月後、カンペは、バゼドウから汎愛学院への招聘を受ける。そしてカンペは、バゼドウの招聘に応じて、汎愛学院の「教育評議員(Edukationsrat)」に就任した。しかしその後、汎愛学院は、学校運営の方針や教育理論・実践に関して、教育者たちの間で対立が生まれ、存続が危ぶまれる状況に置かれてしまう。カンペは、汎愛学院の再建に尽力するものの、長く留まることはなかった。カンペは、デッサウにおける約11ヶ月の滞在の後、1777年9月に汎愛学院を後にしてしまうのである^{vii}。

デッサウを後にしたカンペは、新たな活動の地を求めて、ハンブルクへと移った。カンペがデッサウを去った約1ヶ月後、ケーニヒスベルク在住のカントからハンブルクのカンペに宛てて書簡が送られている。汎愛学院の趨勢を遠方の地から見守っていたカントが、ハンブルクにおけるカンペの身の上を案じてのことである。

「尊敬に値する友よ！私は、あなたの身に危険が迫ったということ、汎愛学院をあきらめて、汎愛学院が没落する前に離れる決断をしたことを、たいへんな同情とともに耳にしました。・・・あなたが、私の期待するような力と、生き生きとした精神をすっかり取り戻しているかどうか、汎愛学院にとって良い時代が訪れ、十分な支援が行われるかどうかが肝心です。・・・あなたが自分の利益を考へることなく専念した施設のためにも、心機一転して、相応しい仕事に取りかかることができるためにも、すべての誠実な人は、しばらくの間、あなたが休息することを望んでいます。」(カント 1777年10月31日)^{viii}

またカントは、カンペに対して、当時ケーニヒスベルクで空席となっていた職(「上級説教師(Oberhofprediger)」と「総監督(Generalsuperintendent)»)を斡旋しようとしたが、カンペは、これを辞退している。カンペは、ハンブルクにおいて執筆活動によって生計を立てる決心をしていたのである。

(2) ハンブルクにおける執筆活動と教育実践

1777年から1783年までの7年間、カンペは、ハンブルクにおいて多数の著書を執筆している。『教育的談話』(1777年)、『教育的観点における感受性と感傷』(1779年)、『若きロビンソン』(1779年)、『子どものための小心理学』(1780年)、『アメリカ発見』(1781年)、『テオフロン』(1783年)などである。なかでも『若きロビンソン』はベストセラーとなり、カンペは、児童・青少年文学作家として一躍有名になった。

また1778年春には、カンペは、ハンブルク近郊のビルヴェーダーの地において教育施設を設立し、ハンブルクの商人子弟の教育を引き受けている。この教育施設は、「家庭学校(Familieninstitut)」と呼ばれ、著書『若きロビンソン』の口絵にも示されているように、家庭的な雰囲気にも包まれた学校であった。シュミットによれば、「家庭学校」は成功を取めたという。しかしカンペは、5年以上にわたり続けていた「家庭学校」の運営を、友人のトラップに委託してしまう。その理由は、カンペが執筆活動と教育実践の負担から体調を崩したためであり、またカンペ自らが教育実践に満足していなかったためとも言われている^{ix}。「家庭学校」をトラップに委託したカンペは、1783年の春に、ハンブルクから東に約20キロ離れたトリッタウへと移り、同地で静養することになった。

ハンブルクからトリッタウへと移ったカンペは、しばらく静養した後、「実践的教育者の会」の設立に向けて活動を開始する。シュミットは、この時期のカンペの行動について次のように指摘している。

「カンペは、ビルヴェーダーの施設(家庭学校)の引き渡しの後、すぐに全学校制度および教育制度の普遍的点検の計画を起草し、手書きで、あらかじめ想定していた協力者に対して送付した。ほぼ同時に、カンペは、カール・フィリップ・モーリッツ、フリードリヒ・ゲディケ、

そしてノイルピンのヨハン・シュトゥーフエといった心当たりのある協力者と、当時では、比類なき素晴らしい計画について、個人的に会話を行うために、ベルリンへと旅行した。」^x

カンペは、協力者を得るためにベルリンへと赴き、協力者として適任と考える人物を訪問し、自らの計画について個人的に会話を行った。その後、カンペは、ベルリン旅行を契機に得られた協力者の名前を、啓蒙雑誌に掲載し、公衆へ通知するのである。

4. 「実践的教育者の会」の設立に向けて

(1) 啓蒙雑誌に掲載されたカンペの計画一覧

カンペは、『ベルリン月報』(1783年8月号)^{xi}に、自らの活動の目的と意義を記載した初期計画を掲載する。初期計画には、18世紀末ドイツにおける教育思想を精査する必要性とともに、協力者の名前が記載されている。その後、カンペは初期計画を修正して、第1次改訂版、第2次改訂版を作成する。カンペが作成した計画を時系列に列挙すると次のようになる^{xii}。

1. 「実践的教育者の会による全教育制度の普遍的点検に関する計画」『ベルリン月報』(1783年8月号)(初期計画)
2. 「実践的教育者の会による全教育制度の普遍的点検に関する計画」『エフェメリデン』(1783年11月号)(第1次改訂版)
3. 「実践的教育者の会による全教育および学校制度の普遍的点検に関する計画」『ハノーファー雑誌』(1783年11月号)(第1次改訂版)
4. 「全教育制度の意図された点検に関する追加通知」『ベルリン月報』(1784年1月号)(追加通知)
5. 「実践的教育者の会による全学校および教育制度の普遍的点検の進捗に関する追加通知」『エフェメリデン』(1784年11月号)(第2次改訂版)
6. 「実践的教育者の会による全学校および教育制度の普遍的点検の進捗に関する追加通知」『ベルリン月報』(1784年12月号)(第2次改訂版)
7. 「実践的教育者の会による全学校および教育制度の普遍的点検の進捗に関する追加通知」『ドイツ博物館』(1784年12月号)(第2次改訂版)

次に、初期計画、第1次改訂版、第2次改訂版の概要を確認しながら、「実践的教育者の会」の設立過程を明らかにする。

(2) 初期計画の概要

カンペは、『ベルリン月報』(1783年8月号)に掲載した初期計画の冒頭で、18世紀ドイツの教育状況について言及している。カンペによれば、ドイツでは、既に10年も前から、子どもの教育への関心が高まり、「発酵(Gährung)」状態にあったという。しかし、こうした状況は、子どもの教育方法に関して、様々な誤解を招く要因ともなっていた。カンペは、次のように述べている。

「人は、古い教育方法の誤りを見抜くと同時に、たくさんの健全で質の良い穀物をも、埃だらけの粗穀とともに退けてしまった。・・・父親、母親、そして新米の教師は、多数の教育書によって、またその中で主流となっている諸原則の相違によって、また多数の方法によって困惑している。それゆえ彼らは、採用すべきもの、受け取るべきもの、また退けるべきものの大部分が、もはや分からないのである。」^{xiii}

このような状況を危惧したカンペは、18世紀末ドイツにおける教育思想を精査することを計画する。同試みは、様々な教育原則が混在している中で、採用すべき原則、退けるべき原則を明確にする作業であったと言えよう。

さらにカンペは、次のように続ける。既にドイツには、「教育学(Erziehungslehre)」を構築するにあたり、必要となる有益な資料は十分に存在している。しかし、資料は体系的に整理されることなく、「瓦礫とごみに混じって、乱雑に重なり合って横たわっている」^{xiv}。「思考力、観察力、そして行動力を兼ね備えた経験豊かな教育者」、すなわち「実践的教育者」が議論を重ね、彼ら固有の経験に基づいて資料を整理することが期待されていた。

「このような方法で・・・これまで、如何なる時代、如何なる場所においても、誰も手にしたことのないような作品が、ドイツにおいて作られることを、私は確信していた。」^{xv}

上述したように、カンペは、協力者を得るためにベルリンへと旅行し、同時に、ゲディケからも協力者に相応しい人物を推薦してもらうことで、多数の協力者を得ることに成功した^{xvi}。カンペは、初期計画の中で、ベルリン旅行に際しての思いを次のように語っている。

「私は・・・レーゼヴィッツ、エーラース、ブッシュ、エーベリンク、フンク、トラップ、ゲディケ、シュトゥーフ、リーパークーン、ザルツマン、ヴィヨーム、ロホー、バルト、プフェッフエル、レルゼ、モーリッツ、といった人々を訪問して・・・我々の同世代と後世の人々のために力を貸してくれるよう、お願いすることに決めたのです。」^{xvii}

上述の16人のうち、ロホーは健康を理由に協力を辞退したが、15人が協力を約束した。カンペは、経験豊かで教

育に精通した15人の協力者を得たのである。

(3) 改訂版の概要

カンペは、『ベルリン月報』(1783年8月号)に初期計画を掲載した後、それを修正して、継続的に計画を公表することにした。その目的は次の3点である。

- ①計画の進捗状況を公衆に知らせるため
- ②新しい協力者を随時、紹介するため
- ③公衆からの支持を広く獲得するため

カンペは、計画の進捗状況を報告し、また新規加入の協力者を随時、紹介することで公衆の関心を集めようとした。また計画への支持を広く獲得するために、カンペは、複数の啓蒙雑誌に計画を掲載した。カンペは啓蒙雑誌の編者に対して、可能であれば計画の全文を、難しい場合には、計画の一部分でも掲載してもらえるように依頼した。その結果、初期計画の第1次改訂版が、『エフェメリデン』(1783年11月号)と『ハノーファー雑誌』(1783年11月号)に掲載された。『エフェメリデン』には、編者であるイーゼリンの推薦文が添えられて、計画の全文が掲載された。

「当初、この計画は、ベルリン月報の8月号に掲載されました。計画は少し必要な修正がなされて、ここに掲載されています。・・・きっと著書は公衆の支持を獲得するでしょう。・・・この優れた計画の発起人である顧問官カンペ氏は、この計画によって、これまで以上に、公衆から尊敬を集めています。公衆が告知済みの著書を、予約注文することによって、強く支援することは確実であると思われれます。」^{xviii}

このようにカンペは、当時刊行されていた啓蒙雑誌を積極的に活用することで、自らの計画を、広く公衆に通知したのである。

またカンペは、初期計画の掲載から5ヶ月後、『ベルリン月報』(1784年1月号)に「全教育制度の意図された点検に関する追加通知」を掲載する。「追加通知」の目的は、計画の修正と新たな協力者の紹介であった。

「この月刊刊行物の8月号に掲載した、実践的教育者の会による全学校および教育制度の普遍的点検の最初の告知以来、私には、計画の本質部分に関係はないですが、多少の修正が必要であるように思われます。私は、共感的な読者に対して、修正箇所を、この月刊刊行物によって、お知らせしなければなりません。」^{xix}

「追加通知」において、カンペは、新たな協力者を3名紹介している。

「すでに挙げられた、この著書の16人の執筆者に対して、さらに幾人かの分別ある教育者と教師が、協力者として

仲間に加わりました。ドレスデンのベッカー教授、リーグニッツのシューメル教授、・・・祖国に対する功績があるにもかかわらず、あまり知られておらず、正当に評価されていないベルリンの教育者マイヤー氏です。」^{xx}

カンペは、多数の優れた教育者が連携するという計画の目新しさにより、公衆の注目を集めることができると考えていた。

その後カンペは、第2次改訂版を、『エフェメリデン』（1784年11月号）、『ベルリン月報』（1784年12月号）、『ドイツ博物館』（1784年12月号）の3つの啓蒙雑誌に掲載する。第2次改訂版では、計画の修正とともに、新たに9人の協力者が紹介されている。

「1年半前に紹介した全学校および教育制度の普遍的点検に関する計画に、数多くの参加者と支援者が集まり、計画の実現は確実であることを、私は、少し前に、公衆に対して通知しています。また私は、この著書の第1巻が、次の復活祭の見本市で確実に刊行されることを、適当な時期に通知しました。ただ私には、この計画の友人と支援者に対して、著書の計画が最初に通知されて以降、行われた変更や修正、さらには、その間に、我々の会に参加することになった、多数の威厳ある人々の名前をお伝えする義務があります。」^{xxi}

第2次改訂版において、カンペは、下記の9名の協力者を紹介している。

1. ハルベルシュタットの校長フィッシャー氏
2. アルトナのウンツァー教授
3. 高貴なドイツ王子
4. デュッセルドルフの宮廷顧問官ブリンクマン氏
5. ブランデンブルクの説教師ボルテ氏
6. ルドルフィ氏
7. ルドルフィ嬢
8. ライプチヒのヒンデンブルク教授
9. ハンブルクのフォーゲル氏

最終的に、「実践的教育者の会」は、「正規会員」11人と「臨時会員」15人の計26人で構成された^{xxii}。「正規会員」は、『点検書』の編纂に係るあらゆる活動に従事し、「臨時会員」は、計画の特定部分に従事することになった。

5. カンペの活動に対する当時の評価

以上のように、啓蒙雑誌に掲載されたカンペの計画を分析することで、「実践的教育者の会」の設立過程が明らかになった。では、このようなカンペの活動は、当時のように評価されたのだろうか。当時を代表する書評誌に、出版業者をニコライによって刊行された『ドイツ百科叢書』（1786年）がある^{xxiii}。『ドイツ百科叢書』において、教育は、国家行政、立法、宗教および教会制度と

ともに、「定期的な調査が求められる重要な人間の業務」として位置付けられ、カンペの計画は、教育の調査を実施したものとして、次のように批評された。

「多くの探究者、また著作などにより名誉ある著名な教育学者が集まり、彼らによって共同で検査されたあらゆる教育理論が我々に提示されるという、いま目の前にある企画は、教育に関心のある公衆にとっては、とりわけ好ましく思われます。大多数の予約注文者の数が、私の述べたことを立証しています。その数は2000人に近い。言うまでもなく、ドイツにいる相当な数の両親、教育者そして教師の数と比較すると少数ではありますが。しかし今や、教育が我々の祖国の素晴らしい業務であり、多くの人々によって行われており、公衆も信頼を寄せていることを立証するには十分なのです。」^{xxiv}

書評誌からは、カンペの活動が公衆の注目を集め、好意的に受け入れられた事実を確認することができる。

またパウアーは、ドイツの教育的作家を紹介した著書『ドイツにおける教育的著作家の特徴』（1790年）の中で、カンペの計画を、次のように批評している。

「全学校および教育制度の普遍的点検の出版は大規模な計画であった。そしてカンペ氏は、この計画を首尾よく実現したのである。如何なる時代においても、また如何なる国においても、いまだかつて所有されたことのない、この著書は、ドイツにおける教育の時代を最高のものにするのである。」^{xxv}

以上のように、「実践的教育者の会」を設立し、18世紀末ドイツにおける教育思想を精査するというカンペの試みは、ドイツの公衆からは一定の評価を得ていたことが確認される。

カンペは、『ベルリン月報』（1783年8月号）で、自らの計画を公表し、その約2年後の1785年には『点検書』を刊行した。約2年という短期間のうちに『点検書』の刊行を実現したのは、カンペの手腕によるところが大きいと言える。

6. おわりに

最後に、本稿の意義について確認しておきたい。これまで教育史において、「汎愛派」の活動は、バゼドウが設立したデッサウの汎愛学院における教育実践に代表されてきた。その結果、カンペ、トラップ、ザルツマンといった人々は、「汎愛派」という枠組みのもと、バゼドウの協力者として位置付けられてきた。しかし彼らは、それぞれが固有の活動を通じて教育史に名を残してきたのであり、彼らを「汎愛派」という枠組みで理解するには限界がある。

本稿では、啓蒙雑誌に掲載されたカンペの計画を手掛かりに、「実践的教育者の会」の設立過程を考察した。

その結果、18世紀末ドイツの教育思想を精査するというカンペの活動が、幅広い人的ネットワークを背景に展開されていたことが明らかとなった。ここからは、「実践的教育者の会」のコーディネーターというカンペの新たな一面を確認することができる。

今後の課題は、カンペ、トラップ、ザルツマン、ロホーといったバゼドウの後継者世代にあたる人々の活動について、詳細な検証を続けることにより、彼らの活動を、「汎愛派」の枠組みにとらわれることなく評価することである。

【註】

ⁱ Kersting (1992,1996)

ⁱⁱ 森川 (2010年、239-240頁。)

ⁱⁱⁱ 山内 (2010年、247-249頁。)

^{iv} Austermann (2010)

^v 既に明らかにされている歴史事実に関しては、先行研究の知見に依拠して考察を進めた。アンハルト—デッサウ侯国およびバゼドウの汎愛学院に関する歴史描写は、シュミット (Schmitt 2007,S.125f.) およびシュミット編『カンペ書簡集』の序論 (Schmitt 1996,S.35-38.)、そして山内 (2010年、47頁。) を参照した。

^{vi} Schmitt 1996,S.35.

^{vii} カンペが汎愛学院を去った後、トラップとザルツマンが教師として赴任する。しかし彼らも、数年で汎愛学院を後にする。その後、汎愛学院は1793年に閉鎖された。

^{viii} 111. Vom Immanuel Kant (Königsberg, 31. Oktober 1777) 本稿では、シュミット編『カンペ書簡集』(1996) に収録されている書簡を使用した (脚注は、書簡番号、執筆者、執筆地、日時を示す)。

^{ix} Schmitt 1996,S.44.

^x Schmitt 1996,S.44ff.

^{xi} Hinske 1990,S.20.『ベルリン月報』とは、1783年に編集者であるビースター (Biester,J.E.) とゲディケ (Gedike,F.) によって刊行された啓蒙雑誌である。カントとメンデルスゾーンが「啓蒙」に関する論考を掲載したことでも良く知られている。啓蒙主義研究者のヒンスケによれば、ビースターは政治と文学の領域における、またゲディケは教育学の領域における、ドイツ啓蒙主義の指導的人物であった。

^{xii} 本稿で使用した啓蒙雑誌 (1次資料) は、ビーレフェルト大学附属図書館が公開しているデジタル資料である。参照URL

(<http://www.ub.uni-bielefeld.de/diglib/aufklaerung/>)

(参照日: 2015年9月4日)

^{xiii} Campe 1783a,S.162f.

^{xiv} Campe 1783a,S.163.

^{xv} Campe 1783a,S.164.

^{xvi} ゲディケは、カンペ宛ての書簡 (1783年7月25日) の中で、協力者に相応しい人物を5名紹介している。フランクフルトのシュタインバルト、ニュルンベルクのザットラー、シュロイジンゲンのヴァルチ教授、リーゲニッ

ツのシューメル教授、そしてベルリンのマイヤー氏である。

^{xvii} Campe 1783a,S.164f.

^{xviii} Campe 1783b,S.501f.

^{xix} Campe 1784a,S.95.

^{xx} Campe 1784a,S.96.

^{xxi} Campe 1784c,S.585f.

^{xxii} ロホー、マイヤー、ウンツァーの3人を除き、新たにクレッチュケが加わることで会員数は26人となった。

^{xxiii} 『ドイツ百科叢書』の詳細と編者であるフリードリヒ・ニコライについては戸叶 (2001) を参照。とくに同著の第三章『ドイツ百科叢書』(83-104頁) を参照。戸叶によれば、『ドイツ百科叢書』とは「様々な知の領域にわたる総合的な書評誌」である。また「この書評誌で取り上げられた書籍の数は、実に8万冊に及ぶという。書評者はのべ433人で、大学教授、医者、教師、牧師その他、一般的な学識者であったが、皆ニコライの忠実な友人あるいは協力者であった。」(84頁) カンペもまたニコライの協力者の1人であった。

^{xxiv} Anonym 1786,S.243.

^{xxv} Baur 1790 (1981) ,S.73.

【参考文献】

(1次資料: 啓蒙雑誌は、ビーレフェルト大学附属図書館が公開しているデジタル資料である。)

Anonym: Recensionen. In: Allgemeine deutsche Bibliothek 1786,65.Bd.,1.St.,S.242-244.

Baur,S.: Charakteristik der Erziehungsschriftsteller Deutschlands Ein Handbuch für Erzieher. Leipzig 1790 (Vaduz/Liechtenstein 1981) .

Campe,J.H.: Plan zu einer allgemeinen Revision des gesammten Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. In: Berlinische Monatsschrift August 1783a,S.162-181.

Campe,J.H.: Plan zu einer allgemeinen Revision des gesammten Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. In: Ephemeriden der Menschheit November 1783b,S.501-526.

Campe,J.H.: Plan zu einer allgemeinen Revision des gesammten Erziehungs- und Schulwesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. Hannoverisches Magazin. 94,95. Stück, November 1783c,S.1489-1512.

Campe,J.H.: Fernere Nachricht von der intendirten Revision des gesammten Erziehungswesens. In: Berlinische Monatsschrift Januar 1784a,S.95-96.

Campe,J.H.: Fernere Nachricht von dem Fortgange der allgemeinen Revision des gesammten Schul-

- und Erziehungswesens, von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. In: Ephemeriden der Menschheit November 1784c,S.585-610.
- Campe,J.H.: Fernere Nachricht von dem Fortgange der allgemeinen Revision des gesammten Schul- und Erziehungswesens, von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. In: Berlinische Monatsschrift Dezember 1784d,S.515-535.
- Campe,J.H.: Fernere Nachricht von dem Fortgange der allgemeinen Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. In: Deutsches Museum 12. Stück. Dezember 1784e,S.481-498.
- Campe,J.H.: Allgemeine Revision des gesammten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. Hamburg, Wolfenbüttel, Wien, Braunschweig 1785-1792 (Vaduz/Liechtenstein 1979).
- Schmitt,H. (Hrsg.) : Briefe von und an Joachim Heinrich Campe : Band1 Briefe von 1766-1788 Wiesbaden 1996.
- (2次資料)
- Austermann,S.: Die „Allgemeine Revision“ : Pädagogische Theorieentwicklung im 18.Jahrhundert. Bad Heilbrunn 2010.
- Hinske,N.: Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift. Darmstadt 1990.
- Kersting,C.: Die Genese der Pädagogik im 18. Jahrhundert : Campes »Allgemeine Revision« im Kontext der neuzeitlichen Wissenschaft. Weinheim 1992.
- Kersting,C.: J.H.Campes ‚Allgemeine Revision‘-das Standwerk der Pädagogik der Aufklärung, In: Schmitt,H. (Hrsg.) : Visionäre Lebensklugheit JOACHIM HEINRICH CAMPE IN SEINER ZEIT 1746-1818. Wiesbaden 1996,S.179-194.
- Klüpfel,A.: Das Revisionswerk Campe’s ein Grundwerk der deutschen Aufklärungspädagogik. Lassleben 1934.
- Pinloche,A.: Geschichte des Philanthropinismus. Deutsche Bearbeitung von Rauschenfels,J. und Pinloche,A. Leipzig 1914.
- Schmitt,H.: Vernunft und Menschlichkeit. Studien zur philanthropischen Erziehungsbewegung. Bad Heilbrunn 2007.
- Ulbricht,G.: Allgemeine Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens von einer Gesellschaft praktischer Erzieher. Berlin 1957.
- 戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人 フリードリヒ・ニコライ』朝文社、2001年。
- 山内規嗣『J.H.カンペ教育思想の研究—ドイツ啓蒙主義における心の教育—』ミネルヴァ書房、2010年。
- 森川直『近代教育学の成立』東信堂、2010年。